
神は俺を不幸にした.

椎名 素一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神は俺を不幸にした・

【Nコード】

N8212X

【作者名】

椎名 素一

【あらすじ】

「神と出会って不幸になりました」

神との出会い

俺は意識が戻る。ここはどこだ？人の声も車の音も聞こえない、目も重くて開けられない。

俺は確か、車に撥ねられそうになっていた子供を突き飛ばして助けようとして・・・あれ、その後が思い出せない。

思い出せるのは、俺はそんな人助けをするような人間ではなかったということだけだ。ふふ、一種の気の迷いか、それとも子供だったからか、と考えているとどこからか老人の声が聞こえてきた

「おい、聡史起きるか」

あれ、不思議だ。老人の声が聞こえたと同時に目が軽くなったぞ？
ん、誰だろう、と思いながら目を開けるとそこには

重そうな杖を振りかぶって今まさに俺に振り下ろそうとしている爺さんがいた

「どわあああああああ！！！！！！」

俺が横に転がって回避したと同時にすごい地響きがおこった。何事だ?!と今居た場所を見るとそこが粉々に砕け散っていた。

この爺さんどんだけ桁違いな力してんだ？！と思っていると、その爺さんが俺の方を向いて、にかっと笑いながらこう言った

「お主はもう、死んでおる」

ええー

何それどういう事？え、何で北〇の拳みたいな事を、見知らぬ白髪白髭のお爺さんに言われなはいけないの？！

ちよつと待て落ちて着けミイ、クール、クール、クール、まずは相手に何者なのかを聞かなければならない

「えっと、貴方は何者ですか？」

「ん、ワシか、ワシは神じゃ」

「へえ、そーなんだー（棒読み）」

「何故、棒読みなのじゃ！」とすごい剣幕で怒っている神を無視しながらこの空間から脱出する方法を考える。考えてみて「神」とやらに聞いてみるのが良いと、思い立ったので「神」に聞いてみた

「なあ、神。」

「それは、神に対する態度なのか？と、思っのじゃが言ってみ」

「こつから出るにはどうすりゃ良いんだ」

「それはな、お主の意識の中にこれからわしが住んでもいい、とお主が誓えばよい」

なんだ、そんな簡単なことか、と思いながら俺は誓った

「よし、これから神が俺の意識の中に住む事を許可しよう」

「・・・まあ生き返らせてやろう」

と神は言った。

そして、光った、ええ！？と思っている内に俺の中に光が入った。そして世界が暗転した。

はっ！、と気がついた時、俺は、ユリの花の匂いに包まれていた・・・まさか、まさかそんなタイミングで生き返ったんじゃないよな。生き返ってないと信じたかったが俺は、‘ふた’を持ち上げて外を見るとそこは俺の葬儀場だった。

それを、見た瞬間込み上げてきた言葉を空に言い放った

「この、糞神がああああ！！」

幼馴染と神と俺と

：朝 家

神、と生き返る為の取引をしてから一週間。

俺は、激動の時代を生きたかのように疲労困憊している。

神の生き返らせるタイミングの悪い事、俺は棺桶に入れられた直後に、生き返ってしまった。そのせいで新聞には、「棺桶に入れられた直後に生き返った奇跡の少年！」などと書かれ、さらには、テレビにも引つ張りだこで、ここ五日間全く寝ていない。

俺は、「芸能人って、テレビに出て楽しく騒いであって、金ももらえる楽な仕事」だと思っていたので、「岡。は、なんで鬱なんかになったんだろう？」と、とても失礼な事を考えていた自分を恨んだ。

今なら分かる、こんなにもつらい仕事をしていれば鬱になる、と。

だが、無情なことに学校は行かなければならない。俺が行っている学校は、カトリック系の学校で、不良なんかはいない、みんな偉いたいして事件も起きない、俺の生き返りを除いては。

（おーい、聡史。聞こえておるか？）

うおっ、何だこの頭の中に響いてくる声は！・・・ってな。

この声には聞き覚えがある。この忌々しい声は・・・

「ちっ、くそじじいか」

おそらく自分にしか聞こえない声であろう、という声で呟いたはずなのに頭の中に返事が返ってきた

（クソじじい、とはなんじゃ！別に寿命を縮めたっていいんじゃないぞ！）

またでたよ。寿命を出して脅すの

「てめー・・・寿命で人を脅すのなんか神じゃねえんだよ！何か、言い訳があるなら言ってみろ！」

（・・・）

あつ、認めた。

俺は、神を言い負かした優越感に浸りながら、学校の制服に着替える。ちなみに、学校の制服は普通のブレザータイプ、どこまでも普通だ。

俺は眠い目を擦りながら階段を下りて、軽い朝食を作り、一人で食らう。

俺の家族は3人家族で、俺、母さん、父さんの3人で構成されている。父は超スーパースター、母は超美人、俺は・・・頭はかなり父親の血が入っていて、外見は・・・残念な事に母の血がちょっと入った感じだ。

みなまで言わせるな。

そんな事を、考えながらスクールバッグを担ぎ、家を出た。

・登校の道

「おっはよ～～！！」

うおっ！俺は、突然後ろから来た何かのせいで、前のめりに倒れた。「いつてえ」と、言いながら後ろを見ると、えっへえ～～という効果音が聞こえてきそうな笑顔を浮かべる、幼馴染の姿があった

「おい、佐奈。お前いい加減やめろつて。」

「いいじゃんか。けち」。あつ、そうだ聡史・・・

「何だ？」

（おい聡史。今から、その佐奈というやつはお前にとびつ・・・）

「ん？何だ」

神に聴いた瞬間、佐奈が俺に飛び掛ってきた

「I LOVE 聡史！！！」

俺は華麗に避けた

「ぎゃーーーー」

なさけない悲鳴をあげながら飛んでいく佐奈。

それを、無視して俺は学校へ行こうとした所を神が叫んだ

（おいっ！いいのか本当にいいのか！？）

「いいんだよ、どうせ士郎のところに飛んでいくんだから」

（士郎というのは誰なのじゃ！というか普通見捨てんじやろうがー！）

「もういいから！」

結局、俺は学校に遅れた大遅刻だった。

：放課後

「おーい、聡史。一緒に帰ろ。」

今は、授業も終わった放課後。俺は佐奈と一緒に帰る約束をしていたので、一緒に帰るところだ。

今日よりひどい日は無かっただろうと思う。授業中、ずっと神が、（こんなのも分からのか）だの（それは、違う！）だの、ずっと言ってきて最終的に、「おんどりやあ、黙ってるー！ー！！！」と、叫んでしまい、クラスの皆から白い目で見られた。

俺が、返事しなかったのが不満だったのか、佐奈が、ローキックで俺の脛を蹴ってきた

「痛っ！分かったからやめろ！」

「ええ、まだまだ蹴ってたかったのに」

「お前、本当に俺の事が好きなのか！？」

本当によく分かんやつだ。

俺が佐奈とじゃれあってると、前からもう一人の幼馴染、士郎が来た。

士郎とは、佐奈と会う前からの幼馴染で、一言で言う運動部のイケメンだ。そんなのが、こちらにすごい顔で、すごいスピードでダッシュしてきた。

「部活を作ったんだけど、はいつてよー！」

はっ？と、思った瞬間、士郎はダッシュの勢いを殺さずに完璧なパ

ンチを、俺の鳩尾に決めていた

「なっ！き・・・きさ・・・ま、お・・・れ・・・を裏切った・・・なあ」
その一言とともに俺の意識は、地の底へ落ちていった。

幼馴染は俺を部屋に連れ込んだ

「……」

俺は、鳩尾の辺りにある不快な痛みで目が覚めた。

目を開けるとそこには、佐奈の顔があつた。しかも、零距离で。

「ぬうおう！」

「あつれ、起きちゃった？」

「『あつれ、起きちゃった？』じゃねえよ！ お前今何しようとした」

俺の予想が正しければ、こいつは今俺にキスをしようとしていたに違いない。絶対にそうに違いない。

だが佐奈は、俺の予想の、右斜め上の答えを言った。

「んっ？ ああ、土郎に教えてもらった スターダストプレス を、どこに決めようかなって思つて、狙いを定めてたの」

「眠ってるいたいけな俺に、何しようとしてんの！？」

本当に危ない！！ と言うか スターダストプレス できんの！？ ちなみに、 スターダストプレス とは、難易度の高さと、危険度から幻の技と呼ばれるものである……あれ？ 今、頭の中で勝手に説明が流れた様な？

（よう。前回、超疎外感を感じた神だ。）

ちっ、またジジイか。と、神に文句を言おうとした時、俺は神の口調が変わっている事に気がついた。

（お、お、お、おお！ 気が付いた？）

（黙れ、くそジジイ）

（相変わらず酷くない！？）

う……っ、う……っ、もう元に戻すわ……うう。と神が嘆いている間に、俺は、今いる 部屋 を眺めた。

俺は学校の事については人一倍知っているつもりだったのだが、この部屋は見た事がなかった。

まず、壁、床、天井、全てコンクリートがむき出しだ。

だが、ソファやテレビ、エアコンにゲーム、ラノベにパソコン、さらには、部屋の隅にトイレの個室みたいなものがある。

十分ここで暮らせていけそうな設備が揃っている。

「おい佐奈。ここはどこなんだ？」と佐奈に聞こうとした時、部屋の入り口から（横にスライドさせるドア）士郎が入ってきた。

士郎とは、俺の幼馴染で佐奈と知り合う前からの付き合いだ。

……俺とは違い、すごくイケメンだ。

くそっ！ 何で俺はこんな普通で、こいつらはルックスが良いんだ！
自分で言ってる何だか悲しくなってきた。あつ、ちょっと涙が……

ガラガラッ

何だ？ 人がすごく悲しくなっている時に、と振り返るとそこには、士郎がいた。

「ああ、起きたのかい聡史」

「うおらあ！！！」

「あつ、こんな所に佐奈がいる」

スカッ

「……」

なん……っだっ……て。俺の長年の恨みがこもったハイキックを避けただと！？完璧な不意打ちだったのに、と俺は驚愕した。

「おい、椎名」

「何ですか？」

「三話目あんま進んでなくね」

「そうだね」

沈黙

「何、この付録いらなくね!？」
「」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8212x/>

神は俺を不幸にした。

2011年11月16日07時16分発行